

積雪時の登校

それはそれ!?

2018. 12. 11

No. 42

校長 渡邊 幸二

E先生からマイスターレポートをいただくと、ついついすぐに読み出したくなります。No.144の「人口密度」の話も目からうろこでしたし、No.146のJ先生のJリーグの実践も面白かったですね。こうやって日々学ぶことに感謝です。こんな学校はそうそうないと思います。

積雪時の登校の様子から

積雪で道路が狭くなり、先生方も車の運転では、毎日、神経をすり減らしていることと思います。運転者のそんな苦労をよそに、今日の登校の様子を見てみると、子ども達は……



- ◆道路がとても狭くなっているのに、2列、ひどい子どもは3列になって歩いている。
 - ◆早く歩きたい大人がいるのに、あるいは子ども達の通過を待っていてくれる大人がいるのに、雪遊びをしながらのんきに歩いている。
 - ◆これまでも何度も注意されてきたのに、雪山に登る子どもがいる。
-

もちろん、こういう点について、具体的に指導することは必要でしょう。しかし、以前にもお話したようにモグラ叩きのような指導では、子ども達は自ら考えてどう行動すべきか判断できる子どもには育ちません。

経営方針の中にも「他者意識・相手意識を育成する」と書きましたが、まさに相手の気持ち・立場を想像する力が育っていないからだと言えるでしょう。自分を客観的に見るということはなかなか難しいことですが、そういうことをさせていかない限りは、自分を客観視したり、自分も含めた物事を俯瞰してみたりする力はいっこうにつかないでしょう。そういう指導の機会は生活の中にいくらかでもあるはずです。

たとえば、図工で絵を描かせるときは、「鳥の視点で」とか「蟻になったつもりで」と、俯瞰したりいろんな角度から考えたりすることをさせるでしょう。そういうことが可能なら、もっと自分の生活や姿もそうやって見るように働きかけるべきです。図工は図工ではないはずです。「5分前行動」も自然教室のときだけ、「大きな声を出して伝える」のも学習発表会のときだけ……。 “それはそれ” ではもったいないと思います。非効率的だと思います。日々の授業は、せっかく培った力を実生活でも、いつでも発揮できるようにするために指導しているのです。絵は絵のときだけでなく実生活でも活かすようにしたいものです。算数でいろんな見方・考え方をさせていますが、その力は算数のときだけでなく実生活でも活かすようにしたいものです。古屋氏のめざす歴史の授業は

「むかし」を学びながら「いま」を見つめ、「これから」を考える

ことだそうですよ。(「学びあ教室文化」をすべての教室に P121)